

日本映画放送株式会社 第86回番組審議会議事録

1. 開催年月日：令和5年8月22日(火) 15時～

2. 開催方式：対面とweb会議ツールを用いて実施。

3. 委員(順不同・敬称略)

出席：鈴木 嘉一・砂川 浩慶

web会議ツールにて出席：神田 由築・倉田真由美・尾形 敏朗・山川 鉄郎

事前意見を提出：宮崎 美紀子

放送事業者

代表取締役社長 石原 隆

専務執行役員：山口 真

常務執行役員：宮川 朋之

編成制作局：三品 貴志 八巻 洋平 荒瀬 佳孝

番審担当：澤 尚志 後藤 健(記) 碓井恭子

4. 議題

(1) 審議事項：時代劇専門チャンネル

「雄呂血〈4Kデジタル修復版〉」「阪妻と雄呂血～田村家の100年～」について

(2) 報告事項：日本映画専門チャンネル

「のん脚本・監督・主演『Ribbon』」テレビ初放送について

5.議題（1）番組概要

1925年に公開された傑作無声映画『雄呂血』は、ラストの15分に及ぶ大立ち回りが日本映画屈指のチャンバラシーンとして知られる名作。戦前の日本映画は戦災やフィルムの劣化などで多くが失われたが、本作は主演の阪東妻三郎本人がオリジナルネガフィルムを保管し、他界後も奇跡的に完全に近い状態で残存していた。

その存在を知った当チャンネルでは、2年かけて『雄呂血』を4Kデジタル修復版としてよみがえらせ、阪妻の没後70年を迎える今年7月に放送した。日本最古のオリジナルネガを最大限に生かし、88,000コマに及ぶ手作業でのノイズ除去や上映速度の調整など、最新技術で公開当時の状態に限りなく近づけた。さらに、国立演芸場花形演芸大賞金賞を受賞した気鋭の活動写真弁士、坂本頼光氏と、海外でも評価の高い作曲家、清水靖晃氏によって新たな音楽が加えられた。

【審議のポイント】

① 「雄呂血〈4Kデジタル修復版〉」は、通常の4K化作業に加え、新たな劇伴と活動写真弁士の音声を加えているが、これらはオリジナルの翻案として付加価値となっているか。

② 「阪妻と雄呂血～田村家の100年～」は、「雄呂血〈4Kデジタル修復版〉」の放送や内容を補完・解説する番組として相応しいものだったか。

6. 議題（１）審議内容 ※文中敬称略

- ・このプロジェクトは本来であれば国が保護すべきことだが、時代劇専門チャンネルが取り組んだのは偉業といってよいだろう。
- ・100年前の映画を現代の私たちが楽しめるとは期待せずに鑑賞したが、単なる勧善懲悪ではなく、主人公が恩人に抵抗してよいのか悩んだ末に怒りを爆発させるといった複雑なストーリーもよかった。
- ・活弁はテンポより主人公の無念や心理面を語りで補う文学的な印象でよかった。音楽はそれ自体が際立たず、映画のメインは映像であるという配慮を感じた。
- ・衛星放送業界が4K化に向けて進んでいるが、せっかく4Kコンテンツを制作したのだから、4Kでの利用を積極的に行ってもらいたい。
- ・関連番組ではネガとポジの違いや、オリジナルネガと判定した根拠の解説などが興味深かく、今回のプロジェクトの価値を伝えていた。
- ・関連番組もただ映画を解説するだけではなく、デジタル修復と田村家の歴史を絡めて膨らませた、知的好奇心をくすぐる内容だった。
- ・修復版の製作は近年屈指の快挙であるし、両番組は時代劇には大きな可能性があるかと視聴者に伝えるものであった。是非ともこのような発掘を続けてもらいたい。

これに対して弊社からの回答は以下の通りであった。

- ・音楽の清水氏と活弁の坂本氏とは企画段階からこちらの要望を伝えていた。活弁は間を使った芝居で、心理描写に重点を置く意図が達成できた。音楽は映像と活弁と融和するものを目指し、三者がうまく噛み合い、1つの作品として成立させることが出来た。
- ・チャンネルではオリジナル時代劇の制作が大きな軸だが、過去の名作にスポットを当てるライブラリーの事業も、視聴者に楽しんでいただけたようだ。
- ・当チャンネルは視聴者を楽しませることが第一義であるので、修復版の放送にあたってはその文化的価値は理解しながらも、果たして今の視聴者を楽しませるものなのかという点を悩ましく思っていた。実際の放送では、田村家のドキュメンタリーとセットにすることで修復版への関心が高まり、一種の博物館的なコンテンツにも多くの視聴者が興味をもっていただけるようになるのではと考えたが、各委員の意見を聞いてこの編成が功を奏したと改めて感じた。

7. 議題（2）報告事項 ※文中敬称略

日本映画専門チャンネル

『Ribbon』テレビ初放送記念「のんのいま」について

俳優、アーティストとして活躍するのんが劇場長編映画を初監督した『Ribbon』と関連作品を特集した。『Ribbon』は当社でも製作幹事として関わった。公開は2022年2月で、制作も公開もコロナ禍のまっただ中に行われた。内容もコロナ禍にいる若者たちの心に寄り添う内容で、今見るとわずか1年前のことだが、あの時はこうだったのか、もう忘れてしまったという記憶がよみがえる。公開一年後の初放送だったが、コロナとの距離ができたところでの放送となり、映画の新しい見方を提供できた。特集では多岐に渡るのんの活動を紹介する編成を心掛けた。

8. 連絡事項

次回番組審議委員会は、2023年11月14日(火) 16時より開催予定。